

ミュージアム 通信

第1回企画展

「江戸の化粧美」 概略

[資料室談議 第2回]

『都風俗化粧伝』等の記述をもとに
江戸時代の化粧を再現



「当世美人合踊師也」(部分) 香蝶楼国貞・国立国会図書館 所蔵

第1回企画展 「江戸の化粧美」概略

**赤・白・黒でつくられた
女の美**

今でこそ女性の顔を飾る色は様々だが、かつてはたったの三色で彩られていた。紅の「赤」、白粉の「白」、お歯黒や眉墨の「黒」がそれである。

化粧の歴史は長い。日本ではすでに石器時代の土偶や古墳時代の人物埴輪に化粧が見られ、文献上の初見は中国の史書『魏志倭人伝』と言われている。

当初、呪術的・儀礼的な要素の強かった化粧が、現在のような美意識の表明行為となり、しかもその習慣が庶民のレベルにまで浸透したのは江戸時代に入ってからだった。当時の女性がわずか三色で追求した美とは果たしてどのようなものであったか。赤・白・黒でつくられた「江戸の化粧美」を追っていくとしよう。

く赤化粧く 華やかさ・女性らしさを演出した「赤」

三色の中で唯一の有彩色・赤は、女性の顔を彩る大事な一色だった。それ故に、口紅だけでなく、頬紅・目弾き(めはじき)・爪紅(つまべに)にと多用された。

頬紅や目弾きには、当時の流行発信者だった遊女や役者の化粧が大きく影響している。頬紅は遊女が差さなくなったことを機に廃れ、今で言うところのアイメイクである



赤化粧

目弾きは、役者の舞台化粧から派生したものだ。

また、口紅の塗り方も現在と異なり、おちよぼ口のような小さな口が好まれたため、唇全体に塗るものではなかった。しかも、上唇よりも下唇のほうを若干濃く塗っていた。

江戸時代の文献には「口紅粉の色濃はいやしきものなり」・「頬さき、口ひる、爪さきにぬる事うすうすとあるべし」とあり、薄化粧が良しとされていた。

く白化粧く 白く美しい肌への憧れは古今問わず

「色の白きは七難隠す」という諺は江戸時代にあっても同様で、当時の女性も白く美しい肌をつくることに真剣だった。その



白化粧

ために肝要とされたのが「白粉をよく溶くこと」である。白粉は水で溶いて使うもので、溶き具合が粗いと綺麗に塗ることができず、また化粧崩れもしやすかったという。白粉の作りようから心掛ける、それこそが美肌を生み出す基本であった。

よく溶いた白粉は、指

先で回しながらむらなく伸ばした後、水に浸した刷毛でさらに均一に伸ばした。刷く回数が多いほど白粉は綺麗に伸び、落ち着きやすかったようだ。

く黒化粧く 女の事情を語った眉とお歯黒

「お歯黒をして半元服」眉を剃り落として本元服」といわれていた江戸時代。女性は結婚を前後して歯を黒く染め、出産を機に眉を剃り落とした。

しかし、江戸後期にもお歯黒をする者が現れ、また庶民の間では各々の顔形にあった眉化粧が楽



黒化粧

生まれた。当時の美容専門書「都風俗化粧伝」には、「眉毛のつくりかた色々あれども、顔の恰好によりてつくりかた変われり」とあり、眉をいじること己の顔の印象が変わることを、江戸時代の女性も強く意識していたことが窺える。

一方のお歯黒だが、これは「くろぐると毎朝つけ給ふべし」とされ、家人が起きてくる前にお歯黒を付け終えておくことが女性の嗜みとされた。板を並べたように隙間のない真っ黒な歯こそが「美人の相なり」と言われていたのである。

みやこふうぞくけわいでん
『都風俗化粧伝』等の記述をもとに
江戸時代の化粧を再現



紅ミュージアムでは、企画展「江戸の化粧美」の開催に伴い、江戸時代の化粧を再現するメイクデモンストラーションを実施しました。今回はその再現メイクの写真と共に、江戸時代の化粧の一端を解説していきます。

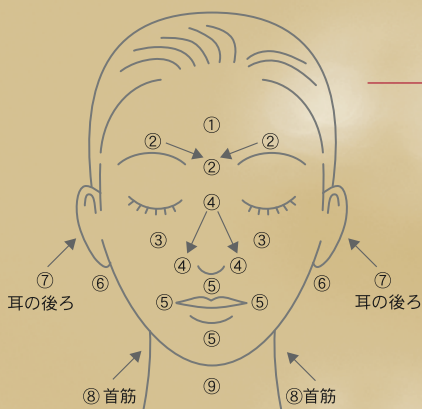
前

回は『都風俗化粧伝』
「化粧之部」より一

部抜粋して解説したが、今回は同部に書かれた化粧手順を主軸に、江戸時代の化粧法を具体的にみていくこととする。

一、白粉を塗る手順

白粉は、左図の①～⑨の順番で塗っていく。まずは額にのせ、指先で回



すようにしてよく伸ばす。

①～⑨に白粉をいっぺんにのせてしまうのではなく、一箇所ずつのせて、そのつど伸ばしていった。白粉は非常に乾きやすく、すぐに固まってしまうため、いっぺんにのせてしまふと最後のほうが綺麗に伸ばせなくなってしまうのである。

耳の白粉は顔より薄く、首には反対に濃く塗るものだった。化粧下地として鬢付け油を塗っておくと白粉の伸びも持ちもよかつたという。

二、刷毛で伸ばす

指で一通り白粉を塗り終えたら、次はその上から水に浸した刷毛で刷っていく。こうすると白粉

はより伸びて、光沢が出た。このとき二～三回刷いた程度では白粉の落ち着きが悪いので、丁寧に何度も刷くこととされた。



三、半紙でパッティング

刷毛で伸ばし終わったら、次は、半紙を顔に当てて、その上から水に浸した刷毛で先ほどと同じように刷く。これにより、白粉と肌との吸着率が高まり、

パッティングに似た効果があらわれたと思われる。



四、粉白粉と仕上げの手拭

次に、パウダー状の白粉を刷毛で顔全体に軽くのせる。均一に粉が行き渡るようさせた後、紙または扇子などを使って顔を扇ぐ。余分に付いた粉を飛ばすためである。

仕上げには、少し湿らせた手拭で、目の周りを軽く押さえた。これは、目の周辺の白粉を薄くする



ためである。この部分の白粉が濃いと、「仮面」のような顔に見えてしまうため、いったん塗った白粉をわざわざ薄くするよう拭い取ったのである。

五、眉を描く
眉は「右からつくるべからず」とされ、左から描くものだった。まず眉尻を簡単に描いてから眉頭を整え、自然に眉尻の方が濃くなるようにした。眉墨をのせる前には紅を引き、眉墨の「黒さ」が際立たないようにした。真っ黒ではつきりとした眉は、目元がきつくみえてしまうため、「ほのぼの」

目弾きは垂れ目や釣り目など、目の形状によって入れ方を区別していた。垂れ目の場合、上目尻の辺りの白粉を軽く拭い、そこへ紅を淡く入れた。一方、釣り目の場合は、下目尻の白粉を拭い、そこへ紅を淡く入れたのである。ちなみに、生燕脂（しやうえんじ）という中国製赤色染料を紅の代用



「うすうす」とした柔らかい黒味を帯びるように、紅を先に引いたのである。

六、目弾きを入れる
目の縁に沿って紅を細く入れる。



とすることもあった。

七、口紅を指す
口紅は、唇全体には塗らないものだった。大きな口や厚い唇は、「賤しい」「人を喰うようだ」と言われたためである。元々そうした口の人は、白粉を唇にまで塗り入れることで唇を小さく見せていた。口紅の濃淡については、下唇のほうを上唇よりも若干濃く塗るのが一般的であった。ただし、口の大きな人は全体的に薄く、小さな人は濃く塗ることが良しとされた。

Information

かわら版

開催中の企画展

「江戸の化粧美」～美は赤・白・黒でつくられた～
2007年2月1日(木)～3月31日(土) 入場無料

次回企画展

「江戸の婚礼」(仮題)
2007年5月15日(火)～7月16日(月)

イベント&講座のご案内

■「紅・白粉・墨を使った江戸の化粧を再現」

2007年3月17日(土)
第1回11:00～12:00/第2回14:00～15:00

■日本の赤「紅」を知る

紅の色って? 紅を点すって? 普段「紅」に触れる機会がない方に、試していただくための講座です。4月は「桜メイク」です。
2007年4月7日(土) 14:00～15:30

※内容・申込詳細は、ホームページに掲載いたします。

Since 1825

伊勢半本店 紅 ミュージアムのご案内

●開館時間/午前11時～午後7時 ●休館日/毎週月曜日 ●入場無料
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL&FAX: 03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線
「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>